

2026年10月5日
港湾労働政策研究所
事務局長 光部泰宏

川崎港湾主催の「オクトーバーフェスト」に参加して

10月2日、川崎東扇島福利厚生センターにおいて、川崎港湾労働組合協議会（川崎港湾）主催の恒例行事「オクトーバーフェスト（筆者が勝手に命名）」が開催され、全国港湾から松永委員長代行をはじめ、複数名が参加しました。

この催しは、川崎港湾と、川崎港を拠点に事業を展開する港湾運送事業者や関係事業者の皆さんが一堂に会し、日頃の労をねぎらいながら交流を深める場として、毎年開催されています。港湾で働く労働者と、日頃から港の物流を支えている事業者の皆さんが、肩の力を抜いて交流できる貴重な機会となっています。

当日は、開始直前まで秋雨前線の影響で開催が危ぶまれましたが、夕方には雨も上がり、福利厚生センター前に設けられた会場には、多くの参加者が集まりました。

会場では、ビールやハイボール、チューハイなどを片手に、焼肉、秋刀魚、焼きそばなど秋の味覚を楽しみながら、あちらこちらで会話や笑い声が飛び交いました。

参加者同士が日頃の仕事の苦労や近況などを語り合うなど、和やかな雰囲気の中で交流が深められました。

全国港湾の参加者も、川崎港湾の皆さんによる温かいおもてなしを受けながら、飲める人も飲めない人も、それぞれのスタイルで楽しいひとときを過ごしました。

今回の参加を通じて感じたのは、港湾の現場を知るうえで、こうした日常的な交流の機会が持つ意味の大きさです。港湾労働政策研究所（港労研）は、港湾で働く人たちの実態や声を調査・研究し、港湾労働をめぐる政策課題を考えることを活動の柱としています。

そのためには、会議や調査だけではなく、実際に現場で働く皆さんと顔を合わせ、率直な話を聞き、日頃どのような思いで仕事に向き合っているのかを知ることが重要です。

また、港湾の仕事は港湾労働者だけで成り立っているものではありません。港湾運送事業者をはじめ、さまざまな関係事業者の皆さんが、それぞれの立場から物流を支えています。

今回の交流は、そうした現場の皆さんとのつながりを深め、港湾を取り巻く状況をより幅広い視点から考えるうえでも、貴重な機会となりました。

港労研としても、今後こうした現場との交流を大切にしながら、港湾で働く人たちの声を丁寧に拾い上げていきたいと思えます。そして、そこで得られた気づきや現場の声を、今後の調査・研究や港湾労働政策の検討に生かしていきます。

最後に、楽しく有意義な交流の場を設けていただいた川崎港湾の皆さんに、改めて感謝申し上げます。ありがとうございました。